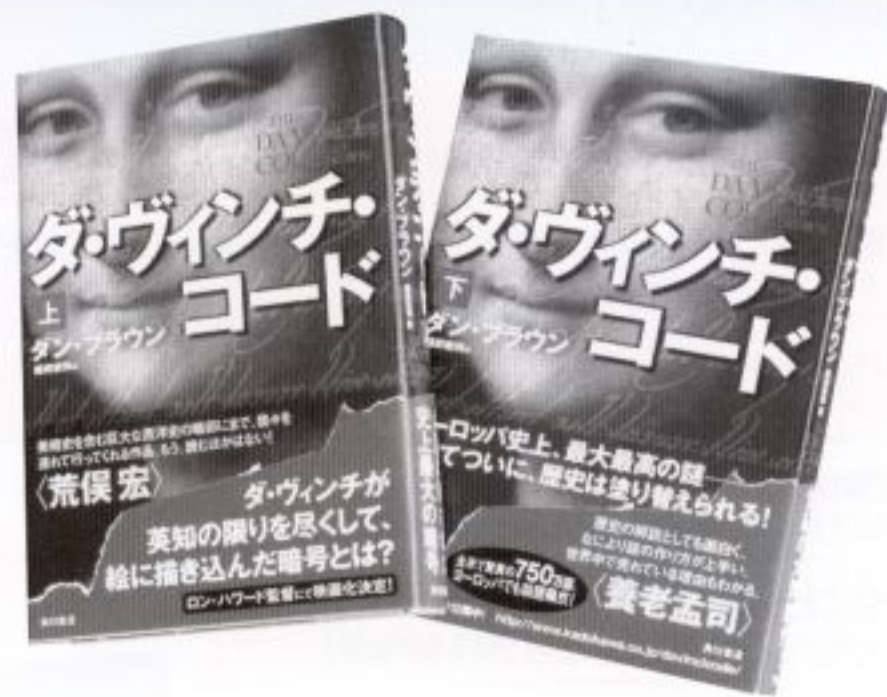


## ダ・ヴィンチ・コード 上・下

ダン・ブラウン著 (角川書店 2004.7)

2004年3月、私は札幌大学女子短期大学部英文学科の学生を連れ、セーヌ川から吹いてくるまだ肌寒い風を感じながら、ガラスで作られたピラミッド型の建物の中へと入って行った。私の美術鑑賞はどちらかというと大雑把で、ゆっくりと時間をかけるタイプではない。一瞥する程度に作品に視線を向け歩いて行く。但し、その僅かな瞬間に私の心を捉える作品との出会いを期待しているのだ。この日は、ダヴィッドの「ナポレオン1世の戴冠式」の迫力に圧倒され、アングルの描く妖艶な白い肌に魅了されながらドノン翼の一番奥にある絵へと歩を進めた。ルーブルでは、誰もがあの微笑を目にするためにこの場所を訪れる。ダヴィンチの「モナ・リザ」だ。500年を経てなお輝きを失わない謎の女性。いつもは人だかりができるのだが、時期的に観光客も少なく、ゆっくり時間をかけて様々な角度からこの絵を眺めることができた。黒いベールと喪服を身につけた女性が浮かべる神秘的な笑みの謎。この謎を読み解くことなどできるはずもないが、不思議な事に、しばらくこの絵を眺めていると、モナリザが背景から浮き出し、立体的に私の目に浮かび上がった。こんな経験は初めてであり、改めてダヴィンチの技量に驚かされた。

さて、今回私が紹介する小説は、まさにこのルーブル美術館での殺人事件が発端となっている。ルーブル美術館館長ソニエールが残した暗号を、ハーバード大学教授ラングドンとソニエールの孫娘ヌヴーが解き明かしていく。私の研究テーマの一つである「異文化間コミュニケーション」では、送り手の伝えようとするメッセージを受け手がどのように解釈するか、つまり、メッセージのデコード(decode)というプロセスに関わる文化差の影響を研究対象としている。コミュニケーションはコード(記号)の発信と解釈の連続である。前述した「モナ・リザ」についても、ダヴィンチの真のメッセージを読み解こうとして、様々な説が発表されている。アメリカの研究者は、コンピューターでモナリザとダヴィンチの自画像を重ね、その特徴が合致



すると発表した。この小説は、画家自身がモデルであるとするこの説を巧みに取り入れているのである。

また、「モナ・リザ」と並びダヴィンチの傑作として有名な「最後の晩餐」についても、今まで思いもしなかった解釈が与えられ、私は知的好奇心をくすぐられただけではなく、一種の衝撃さえも受けた。「最後の晩餐」は、キリストが十字架に架けられる前の晩に、12人の弟子たちとともにした最後の食事の場面を描いたものだ。ユダの恐怖、ヤコブの驚愕など、それぞれの心理状態が浮かび上がる臨場感に溢れたこの絵に秘められた暗号。優美な青年として描かれていると思っていた聖ヨハネに、全く異なるメッセージが隠されているとは。私は小説の下巻に収められている「最後の晩餐」の口絵を眺め、「参ったな」と思わずつぶやいてしまった。

ソニエール殺害を指示した黒幕が誰なのか? 推理小説としても面白い作品であるが、聖杯の謎について、また、キリスト教文化の背景を知る点でもお勧めの一冊である。パリにあるサン・シュルピス教会は、この小説の中で重要な舞台として登場するが、この教会の中に「小説の記述はでっち上げ」という主旨の声明文が設置されて話題を呼んでいる。最近の報道で、聖母マリアの処女懐胎を信じている人は、米国民の79%に上ることが明らかにされたが、キリスト教徒の信仰心を尊重しながら、あくまでもフィクションとしてこの小説を楽しんでほしい。(女子短期大学部助教授 後藤善久)

## セックスボランティア

河合香織著 (新潮社 2004.11)

「ソレデモ……」「イチド デ イイカラ カノジョ ト セックス シタ……カッタ」この言葉が重く心にのしかかる。これはこの本のために取材を受けた重度身体障害者の竹田芳蔵さん(仮名)が語った言葉である。年齢は69歳、脳性麻痺による両上肢機能障害者(日常生活動作不能)、移動機能障害(歩行不能)、気管切開により酸素吸入器常時使用及び言語障害...老人は障害者年金をやりくりしたお金で年に1度風俗店に通っている。その行為の2時間の間は生命維持装置の酸素ポンペを外して...命がけである。こんな生活を約20年間続けている。竹田さんは昔、一度だけつきあってきた女性がいた。彼女は竹田さんが入院していた病院の看護婦で、竹田さんと彼女は一度だけキスをした。彼女のほうからであった。でもそれ以上の行為にはいたらなかった..竹田さんは彼女に「好き」という言葉さえ口にするのができなかった。そのキスの5か月後、彼女は鉄道

自殺を図り、短い生涯を閉じてしまった。竹田さんが風俗店に通いだしたのは彼女が亡くなって2年を経てからである。最初は彼女を失った寂しさを紛らわすためであった。

私はいわゆる健常者である。世間ではあまり話題になることもなく、ともすればタブー視されている感もある「障害者の性」について今までも漠然と考えた事はある。ただこの本を読んで、現実のそれはもっと生々しく動物的なものと感じている。表面ではそれを認めていたつもりでも潜在意識の中では障害のある人にそんな強い欲求がおこらないで欲しいと思っていたのかもしな

